

人は環境をつくり
環境が人をつくる
キーワードは
MOH (もおっ)

M → **も** **もったいない**
循環
他の生命を奪って得たものを使わ
せて頂く

O → **お** **おかげさま**
共生
人は一人では生きられない、環境
によって生かされている

H → **ほ** **ほどほどに**
抑制
欲はほどほどに、良き環境を作り上
げるために

も う

M・O・H

通信

11号
2006
February



「M・O・H」のマーク = 牛

牛は環境の象徴ともいえます。牛糞はメタンガスになり、肥料にもなります。大地を作り、食物を育て、生物を養います。私たちは命の源ともいえる、牛を「MOH」のマークとし、循環型社会の象徴とします



彦根に残る古い町並み

目次

<特集> 企業にとっての社会貢献とは

- 企業人が「町づくり」に目覚めるとき—
山中 片岡鶴太郎工芸館 館主 山岡 勉…1~2
- 山代温泉で、29年続く茶房は、憩いの空間
茶房「庵」女主人 木戸 三枝子 ……2
- 「環境経営」というCSR
対談/高田紘一&森建司 ……3~5
- 2月の切れ水菜
黒川 美富子 ……7
- 八幡商業高校のアンケート ……8
- 読者からのお便り ……8
- ドイツだより—1
原 修子 ……9~10
- ショート・ショート
中井 二三雄 ……10
- 山暮らし子育て日記(漫画)
オノミユキ ……11~12
- 本の紹介 ……10
- さきばあちゃん
今関 信子 ……13~14
- 講演日記 ……14
- 「人間学」を学ぼう その5
井上 昌幸 ……15~16
- <MOH-ECOTOURISM—1>
檀上 俊雄 ……17~18
- M・O・Hニュース ……18

滋賀県立図書館のHPの「刊行物」のなかにあります『ナマズの知恵袋』というコーナーの「言葉を調べる」で、職員が『MOH通信』からヒントをいただいて「もったいない」特集をしております。よろしければ一度アクセスしてみてください。

滋賀県立図書館 岸本岳文

企業人が「町づくり」に目覚めるとき—

伝統産業「山中漆器」の革命児が、山中温泉の振興を目指す

山中 片岡鶴太郎工藝館

館主 山岡 勉

株式会社 正和 代表取締役

「地元」企業であっても、全力疾走する企業人には、地元土地も、会社の立地場所の延長程度には見えな
いかもしれない。全力疾走をやめ、ゆっくりとしたマラソンのスピードまで、ペースダウンした時、初めて「地元」が、目に映るのかもしれない。



工藝館にて。初代当主は、山中温泉で初の商人となった人

山中塗の製造卸業を営む、町きつての旧家に婿入り

山中温泉の中にある「山中 片岡鶴太郎工藝館」を、ご存知だろうか？

この町きつての旧家である山岡家が、昭和6年に建てた、町で最初の洋



開館にあたり、片岡鶴太郎さんが館を訪れ、描いた屏風絵「イヌワシ」。山岡家に代々伝わる金屏風が、キャンバスとなった

館を、平成14年に、館としてオープンさせた。山中温泉の周辺地域で、綿と受け継がれる山中塗、九谷焼、加賀友禅、金沢金箔といった伝統工芸と、「鶴太郎アート」が、大胆かつ伸びやかにコラボレートし、温泉客らの目を喜ばせている。

館主の山岡勉さんは、昭和40年代後半、プラスチックを材質に用いた、近代漆器で、地元の漆器業界に革命を起こした企業人だ。館の正面に位置する、明和元年創業という山中塗の製造卸業「商山堂」に、昭和42年、27歳の時に婿入りした。

七代目当主であった義父からは、かげりの見え始めた、山中漆器の再興を託された、はずだった。

「私は、金沢市内で三百年以上続く農家の長男坊として生まれました。その私が、家業を継がずに婿に入るといふのだから、山中漆器の再興に、どれだけ大きな夢を抱いていたか、おわかりいただけるでしょう」

しかし、勉さんが考える商売のアイデアは、ことごとく義父に却下され、山岡家の人間になつて2年後、勉さんは商山堂からの独立を決意する。



館の1階にはミュージアムショップやカフェが併設されている。出されるコーヒーの器は、もちろん山中漆器

「資本は皆無でしたが、もともと私は、ハンクリー精神が旺盛だったんです。近代漆器のサンプルをライトバンに積み込んで、車を寝床がわりに、北陸から近畿を、営業で走り回りました」

そのバイタリティが実を結び、勉さんは、日本を代表するデザイナー、森英恵さんのデザインを採用した「シック」シリーズの商品化に成功する。これには、勉さんの仕事を一番近くで見ている、夫人の照子さんも、驚いたという。

「田舎の業者さんが、何を言ってきたのかと、軽くあしらわれるのがオチだと思ってたんです。でも、そうならなかったのは、主人の人情によるところが大きかったのかな、と思います。森先生のような著名な方のもとへも、純粋な思いだけで、臆さず飛び込む人ですし、お腹の中を隠さず、すぐに見せるところが、相手の気持ちを動かすんじゃないでしょうか」

山代温泉で、29年続く茶房は、 茶道の精神が宿る、 憩いの空間

茶房「庵(いおり)」
女主人 木戸 三枝子



山代温泉の中心に程近い場所で、29年前から、地元のみならず、遠方の客からも愛され続ける茶房がある。名前を「庵」と言い、主人である木戸三枝子さんの美意識を、集大成したような空間が広がる。質の良いソファ、少し低めに設けられた窓には、黒光りする竹の目隠し、庵のために手づくりされた器など。

「物にこだわり、大切に使いこなすのが、私の仕事だと思っています」。物だけでなく、三枝子さんは、心も形にする。床には打ち水をし、その日の天候で流す音楽を変え、客に合わせて器を変える。

「一番大切なことは、心のつながりです。毎日、通つてくださるお客様で



コーヒードレス(写真は「花水仙」のセット。オシホリをのせた笹船は、三枝子さんが考案し、近隣のホテル等でも真似され出した

も、同じ気分の日はありません。今日は誰かとおしゃべりしたい気分だとか、疲れたから静かにしたいとか、それをソフトに受け入れることが、お客様に喜ばれる理由かもしれませんね」

次に訪れた時も、変わらぬ空間に、人は、最上のもてなしを感じるのかもしれない。



木戸三枝子さん。生まれも育ちも山代の女性。中学の頃から茶道、華道、クラシックバレエの稽古を始めその時、本物に触れたことが、今とても役に立っているという

木戸三枝子

●きとみえこ 1947年山代に生まれ。1969年木戸 猛と結婚。1979年茶道教授の免許を取り修業をしながら「茶房「庵」」を開店し今口に至る。

●茶房「庵」所在地／石川県加賀市山代温泉南町106 定休日／木曜日



昭和6年当時と変わらぬ館の外観。昭和初期の建築物は石川県内では希少な存在。平成11年に、国指定登録有形文化財となった

山中漆器は、町そのもの。 どちらも再興させたい、 自身の思いに気づいて

「しつきんぐ」シリーズは、「金箔の蝶をお椀につけた」と、一躍、市場の脚光を浴びる。これにより、山中漆器は新たな路線を見出したが、その一方で、プラスチックばかりでは従来の山中漆器のイメージを損なうと、地元同業者からの非難を浴びた。しかし、近代漆器の需要が高まるとともに、山中漆器全体の売り上げは確実に回復し、勉さんの業績は地元でも認められるようになった。

「まあ、私は異端児だったんでしょ。義父が亡くなって、私が旗揚げした会社と、商山堂は、また一つになり、

館もオープンさせました。義父が生きていたら、自分もこうしたかったのだと喜んでくれると思います。結局、目指すものは同じでも、それに至るまでのやり方が違っていた、ということなんでしょうね」

仕事一筋に生きてきた勉さんが、知人を介して自ら片岡鶴太郎さんにアプローチし、山中温泉の振興に乗り出したのは、自身の中に郷土への思いがあることに気づいたからだ。

「山中漆器は、この町そのものです。伝統や文化、歴史、それらすべてが、漆器に息づいています。山中漆器を再興したいと願う気持ちは、町を再興したいと願うのと一緒なんです」

昭和の時代を、フルスピードで駆け抜けた勉さんは、照子さんとともに、マラソ



山岡勉さんと、夫人の照子さん。改革派と保守派、全く対照的だそう。照子さん曰く、「息が合わないからこそ、長続きたのかも」

ンのスピードで、平成の今を走りたいと考えている。

山岡勉
山岡照子

●やまおかつとむてるこ 勉さんは、昭和15年金沢市生まれ。高校卒業後東京農業大学農業講座園芸科を修了し、1年間、農業実習生としてアメリカ留学経験を持つ。昭和46年、正和漆器産業を興し、現在、代表取締役社長。山中温泉観光協会副会長。

●山中 片岡鶴太郎工芸館II所在地／石川県加賀市山中温泉湯の出町
〒922-0124
TEL.0761-781-2255
FAX.0761-732-023
http://www.shozando.co.jp

〈M・O・H対談〉高田紘一&森建司 「環境経営」というCSR —持続可能な社会のために—

対談人／高田 紘一 滋賀銀行頭取
森 建司 循環型社会システム研究所 代表

■滋賀銀行 本社
■2005年12月吉日

全国に64行ある地方銀行の中で、滋賀銀行の「環境経営」が注目を集めています。自省内におけるCO₂の6%削減計画（※現在、5.53%を達成）に加え、環境関連融資への金利優遇（エコグリーン資金）や「エコプラス定期預金」など、高いエコマインドから繰り出される独創的な取り組みは、極めて先進的かつユニークであり、各界から高い評価を得ています。

CSR（企業の社会的責任）を、「社会の持続可能な発展のために、社会の一員である当社が果たすべき責任」と位置づける滋賀銀行の高田紘一頭取に、環境経営への取り組みと、そこから見える持続可能な社会、そしてその中の中小企業の在り方について、循環型社会システム研究所の森代表と語っていただきました。

地域のリーディングバンクとして、エコマインドを宿した組織であること

森 滋賀銀行さんは、早くから「クリーンバンク」を標榜し、継続して経営の中に「環境」を取り込んでこられましたね。それが自然な流れで、「環境経営」というCSRに発展し、時代の先見性はもちろん、並々でない信念の強さを感じるのですが。

高田 私が頭取に就任した8年前というのは、ちょうど世紀末の頃です。来たるべき21世紀を展望するに当たって、20世紀の反省の上に立つて、21世紀は平和の世紀であり、また、科学の進歩の代償として破壊した自然環境や地球環境を復元する世紀、つまり環境の世紀にしなければならないと

強く感じました。今、21世紀のキーワードとして、「サステナブル（持続可能）」という言葉が盛んに用いられますが、リーディングバンクとして、滋賀銀行自体がエコマインドの強い、エコオフィス（組織）であらねばならないのと同様に、我々が持つ、地域との接点を活かして、地域の皆さんに、環境保全というテーマの重要性を訴え、共に行動していく責任があると考えてきました。

森 地域のリーディングバンクが、非常に強いエコマインドを宿しておられる。これは、地域の経済活動に、大きな影響を与えていると思いますね。

「エコグリーン資金」、「エコプラス定期預金」など、具体的なアクションを通じて

高田 企業が永続的に存続するためには、環境を配慮するかどうか、将来を左右する重要な要素であるという信念を持って、滋賀銀行の具体的なアクションを通じて、地域の皆さんの意識を喚起し、共に行動を起こしていきたいと思いますというのが、私たちのスタンスです。その具体的なアクションの一つとして、環境事業に取り組む企業に対して、融資する際の金利を、通常より最大で〇.5%優遇する制度を、平成10年にスタートさせました。これをさらに発展させるため、昨年12月から、「しがぎん琵琶湖原則」（通称PLB）というものを策定しました。僭越ですが、企業のCO₂の排出量削減への取り組みや土壌汚染対策など、全部で15項目のチェック項目で、当社独自の「環境格付け」をランクで行うものです。

森 民間金融機関としては、初の取

り組みだそうですね。生みの苦しみもあつたのではありませんか？

高田 この制度に限らず、遡って環境経営そのものを疑問視する声が、実は内部にもありました。金利を優遇すれば、収益は減収となりますから、短期的に捉えれば、確かにそういう見方になるでしょう。しかし、滋賀銀行は、地域のお客様と長年にわたる信頼関係を築き上げ、その土壤で商売をさせてもらっているのですから、短期的に見て、持ち出し金利になっても、それをテコにして、その企業が成長し、成長に伴って社会的評価が上がれば、そこに共栄共存の輪が広がっていくと考えました。そういう長期的視野に

立った捉え方をしようと、これまで随分、口を酸っぱくして言ってきました。

森 そうした経営姿勢が評価され、2003年に「第1回日本環境経営大賞」最優秀賞（主催：日本環境経営大賞委員会）三重県を受賞されましたね。私は、そういった賞の対象となるのは製造業で、製造工程における環境負荷削減等が、評価につながるというイメージがありましたから、そうではない分野の企業が選出されたというのは意外でしたし、いよいよ時代が変わってきたな、という印象を受けました。

高田 日本環境経営大賞は、一都道府県である三重県が、環境省など中



「エコマインドを持つリーディングバンクですね」森代表



「環境問題に取り組む意識を持つこと」高田頭取

中央官庁に働きかけて創設された賞です。地方の時代と言われながらも、実際に地方がイニシアチブをとって、「日本」を冠することは容易でなかったと思います。審査委員長を務められたのが、環境問題の世界的権威である山本良一氏（東京大学教授）だったこともあって、受賞の喜びは、ひとしおでした。森さんが言われたように、実は私も受賞の知らせを聞いて、驚いたんです。しかし、審査員の方々から、受賞理由として「地方の一銀行が、環境経営ということをも、トップ自らの哲学として地域に働きかけている、この点にユニークさと独自性がある」と述べていただき、大変誇りに思っています。また、滋賀銀行の受賞により、環境へのこだわりは、業種や事業規模の大小を問わず、すべての企業に求められているんだということの裏付けにもなったと思います。まず大切なのは、環境問題に取り組むという意識を持つこと。それが社会貢献につながり、売り手よし、買い手よしの、「三方よし」の世界に発展していくと思います。

森 まったく同感です。しかし、消費者はどうかというと、現時点では、環境に配慮した商品よりも、価格で商品を選ぶというのが現実でしょう。環境への配慮を選択肢の一番上に持ってきてもらうために、供給側として如何に知恵を絞るべきか、滋賀銀行さんの商品の一つである「エコプラス定期預金」を例に挙げますと、どういう筋書きが言えますか？

高田 「エコプラス定期預金」は環境配慮型の商品だから、金利が多少安いんじゃないかと思われる方もありますが、金利は通常です。ミソはダイ

レクトチャネルをご利用いただく点にあります。チャネルというのは、お客様との接点という意味で、銀行の場合、お客様にご来店いただくか、行員が外交に伺うか、この二つのチャネルがありました。しかし、IT革命により、インターネット、モバイル、テレフォンを利用したダイレクトチャネルが、三つめのチャネルとして登場しました。滋賀銀行では、現在、定期預金として、年間約400億円をお預かりしていますが、そのうち7割強が、ダイレクトチャネルでのお預け入れに移行しています。その結果、何が起きるかというところ、従来必要であった用紙類が、画面に置き換えられ、ペーパーレスを招くんです。それを原価計算システムで算出すると、1回のお預け入れにつき、紙代約7円が節約できることになりました。もちろんダイレクトチャネルのための設備投資が要りますから、トータル的なコストは五分五分ですが、この7円については、積み上げていって、地域に還元しようとする。その使い道についても、地道に環境保全に取り組まれているNPOなどの組織に役立てていただくとうとう、そういう方針を進めています。

現代版三方よし、「滋賀CSRモデル」の提唱を、滋賀経済同友会から

森 先ほども言われましたが、まさに「三方よし」の世界が広がっていますね。ところで、高田さんは、この「三方よし」とCSRを、どう位置づけてお考えになりますか。

高田 CSRという横文字を使いまして、その言葉の意味する思想も、外国から引つ張ってきたような印象を受けますが、企業の社会的貢献や社会的責任というものは、400年前、すでにこの地で、我々のご先祖である近江商人により構築されていたと思います。近江商人のように、地道な活動の中で、商売の基本道徳を失わないことこそ、CSRそのものであり、CSRは何か特別に難しいことではなく、我々が身をもって、地道に継続していく中に、宿るべきものであらうと思います。

森 2004年の春に、滋賀経済同友会により「滋賀CSRモデル」が提唱されましたが、これはまさに、現代版「三方よし」と言えますね。

高田 私はその年の5月まで3年間、同友会の代表幹事を務めさせていただきました。その間に、会の活動の柱に据えられるものを、皆でつくるうじやないかという機運が高まり、滋賀CSRモデルの提唱に至ったのですが、押し付けや借り物ではない内容にするために、滋賀県らしさとわかりやすさの二つを主眼に取り組みました。滋賀県らしさというのは、近江商人のDNAを引き継ぐ我々だからこそ、という思いを込め、近江商人の商業道徳を手本としている点です。また、わかりやすさというのは、内容を作成するにあたって、国際機関や格付け機関、アナリストといった力を借りずに、シンプルではあるけれども、実践に移しやす

い、わずか55項目の自己診断用のチェックリストに絞り込みました。

森 滋賀CSRモデルは、大きく6つの側面から成り、例えば「倫理価値の共有と社内への浸透」という側面については、十代目外村与左衛門という近江商人が遺した家訓『永世の義を貫く』という文言が、原点の思想として当てはめられています。6つの側面ごとに8から15の項目があつて、合計で55項目。それぞれチェックシートの形式になつていきますから、例えばこれを、社長だけでなく社員もチェックしてみ、同じ会社の中でも、社長と社員の間に、随分と意見や認識の隔たりがあるなど、気づきかけにもなりま

すね。
高田 それが大き狙いの一つです。ですから、この滋賀CSRモデルを「過性のもの」にしないため、國松知事に表彰状を出していただけませんか？と持ちかけましたところ、即断快諾をいただきました。継続して真面目に取り組んだ企業に、光をあてるため、第1回の「滋賀CSRモデル大賞」を、近々発表できる運びに近づけることができました。

循環型社会の中で、中小企業の「自立」と「持続」を可能にするビジネスヒントは？

森 循環型社会における、中小企業の在り方について考えてみたいのですが、循環型社会の到来は、大量生産の終焉を意味すると思います。ですから、循環型社会に移行するまでに、中小企業は大手の下請け型から、自立型になつていないと、非常に厳しいわけですね。一方、循環型社会では「持続可能」ということがキーワードになりますが、この持続可能、つまり永続性ということについては、中小企業は非常に強い思いを持っているんですね。大企業は株主に利益を配分するため、短期的視野に立ちますが、中小企業は、自分の代はそこそこでも、自分の次の代、その次の代へと、会社が継承されることを願って、長期的視野に立ちますから。そうすると、今後、時代の後押しもあつて、中小企業の活躍の場が増えていくのではないかと思

うのですが。
高田 もちろんそうなると思います。そのために、私は中小企業こそ、環境問題への取り組みを、自社のビジネスに取り入れる気持があるかないか、そこが将来に向けて重要な分岐点になると思います。自社の永続を考えても、何もしないのでは誰も手を差し伸べてはくれません。そこで、環境問題と自



顧客の距離を近づける工夫も大切

分の仕事に、何か接点はないだろうか？と考えるんです。例を挙げますと、掘削技術のある土建会社が、土壌汚染の問題に着目して、土壌の検査探知を行える掘削技術を開発しました。その技術は高く評価され、行政からも仕事の依頼が増えていきます。まさに行政依存型ではない、民の自立型ビジネスであると言えます。

森 そういったビジネスにおける発想の転換を図るヒントの一つとして、高田さんはいち早く「LOHAS(ロハス)」という考え方をPRされました。「Lifestyles of Health and Sustainability」の略で、「健康と持続可能な社会を志向するライフスタイル」を意味しますが、滋賀銀行さんも、「LOHASマインドの高い銀行」をめざしておられますね。
高田 私は特に、健康のH(Health)と、持続可能性のS(Sustainability)に意味があると思っています。消費者にとつて、健康はもちろんのこと、環境に配慮した商品やサービスの提供は、一番関心のあるところですね。これからの時代のニーズを、的確に表現した言葉だと思えますし、実際、これに注目する業界が増えています。LOHASの発想で、新しいビジネスが展開される中に、中小企業が活躍できるチャンスも、必ずあるはずだと思います。結局、ビジネスというのは、お客様ありきで、お客様との距離が近ければ近いほ



LOHASの発想でビジネス展開を

に切り入れる気持があるかないか、そこが将来に向けて重要な分岐点になると思います。自社の永続を考えても、何もしないのでは誰も手を差し伸べてはくれません。そこで、環境問題と自

ど、きめ細かなビジネスができます。売り手の理屈で物を売るのでなく、お客様が求められる品質の高い商品やサービスを提供することが、サステナブルにつながるのだ、と思いますね。
森 お客様との距離、という点で思つたのですが、先ほどお伺いしたダイレクトチャネルの場合、その距離を遠ざけることになりませんか？ 私も含め、顔なじみの行員さんに、もう来てもらえなくなるのかと、そうお考えになる顧客もおられるのでは。
高田 まさに売り手の理屈ですね(笑)。銀行として、IT技術の利用は利便性の向上につながりますから、これはこれで徹底して追及する義務があります。しかし、それオンリーでは、森さんのおっしゃるとおりですから、私は「クリック・アンド・モルタル」ということを最初から言っています。クリックはIT技術を活用することです。モルタルというのは、堅ろうな建物のことです。銀行と中にある行員を表しています。銀行にお越しいただき、サロンでお客様とのコミュニケーションを図つて、という従来のチャネルはむしろ中身を強化して、滋賀銀行の知恵と親切をご提供させていただく。これがコア



両雄ガッチリと握手

（核）にならないことには、滋賀銀行の存在意義が薄れてしまいます。逆に言えば、このコアの部分こそが、都市銀行にまねできない、地方銀行の強みだと思っています。

持続可能な社会は、後退ではなく、「新たな創造」の先に実現する

森 それを聞いて安心しました（笑）。最後に、M・O・Hの精神も、先ほどのL・O・H・A・Sという言葉の意味するところも、根底は同じだと思えます。お金目的でない生き方、肉体的にも精

神的にも健康な生き方、新しいライフスタイルを創造するために、今年もM・O・H通信読者会を開催して、これまで紙面で紹介してきた方々と、読者の皆さんによるコラボレートのお場を設けたいと思っています。

高田 大いに期待しています。もったいない、おかげさま、ほどほどに、どれをとっても全くそのとおりだと思えます。ただ、環境配慮型のビジネスやライフスタイルを提唱する上で、注意しなければいけないのは、単に理想郷をめざしましょうと言っているのではないということ、正しく理解されることだと思えます。理想郷をめざす

というのは、下手をすると、縮み志向になりがちです。そうではなく、今ある環境問題に対して、人間の知恵と技術力を集大成して、新たな時代を切り拓くのだという、後退ではなく「進化」のための活動であることを、明確にする必要があると思います。

森 前向きな意識転換と、もう一つは自分が生きている間は、何とかなるんじゃないかという無責任さを改めていきたいと思っています。余談になりますが、どうも我々の世代は、地球の環境や、未来に、敏感にならざるを得ない宿命的なものを感じるんですが。

高田 同感です。私も、これは我々の

世代に課せられた役割だと思っています。自然と親しみ、薪で風呂を焚いたり、そういう時代を経験しているからだと思えます。しかし、それをそのまま今の若い世代に伝えようとする、「オヤジのぼやき」と言われてしまいますから、L・O・H・A・Sといった現代的な解釈を用いて、前向きなテーマとして行動の幅を広げていくことが一番大切だと感じます。

森 おっしゃるとおりです。本日は貴重なお話を、どうもありがとうございます。これからも頭取や滋賀銀行さんが、時代を先取りしたオピニオンリーダーとして活躍されることを期待したいと思います。

高田 浩一

● たかた 一（つ）いち 昭和14年生まれ。昭和37年京都大学経済学部卒業。同年、日本銀行に入行。同行で文書局長、老査局長、監事を歴任。平成6年日本銀行退職後、滋賀銀行常勤顧問に就任。翌7年に代表取締役副頭取、9年に現職の代表取締役頭取に就任。

森 建司

● もり けんじ 1936年、滋賀生まれ。滋賀県立長浜北高校卒業。新江州（株）代表取締役会長。滋賀経済同友会特別幹事、滋賀経済産業協会副会長など。著書／「吃音はなある」遊タイム出版、「循環型社会入門」新風舎

2月の切れ水菜

黒川 美富子

ほんのりといそいで廻る水菜売り

辞典の紹介には「雑俳、手引草」とあるのだが、作者を調べあたれない。正月二日、江戸、京都、大阪の三都では、初売りとして丑から寅の刻(午前一時から五時)のころ、ロウソクを灯して蔬菜類の初売りをした。ほんのり空も明けそめたので、急いで水菜を売り廻っている情景だろう。

今、水菜は「京のブランド産品」のロゴマークつきで、年中出回る京野菜の代表格である。

農家に聞くと、年中出回っているのはハウス栽培で、種蒔きから収穫までが、夏期で二十五日、冬季で六十日から八十日という。根元が親指ほどに育ったら出荷される。



元京都府農業指導所長の林義雄さんによると、そのルーツはナタネ油をとるアブラナ菜類だということ。

どこで誕生したかは不明だが、江戸初期の京都、東寺や九条のあたりで、畦の間に水を引きいれて作ったことから「水いれ菜」と呼び、やがて「水菜」になったと推理されている。

関東では「京菜」と呼ぶ。別名もいろいろあって、千筋菜、千本菜、糸菜、柘(ひいらぎ)菜。私の故郷高知県では糸菜だった。白く長い茎(葉軸)を糸に見立てた呼び名だ。千筋や千本にも、葉軸の数が多くことが象徴されている。柘菜は、葉つばの姿がギザギザなところから呼んだのだろう。京都では葉先の丸い壬生菜と区別するため「切れ水菜」と呼ぶ。

その地、かの地で人々が親しんだ、冬の菜つ葉なのだ。

水菜のほんとうの旬は霜の降りる晩秋から、蕾をつける三月半ばまでである。

「今日のおばんさいは、お揚げさんと水菜の炊いたんよ」とか会話されて、京の庶民の食卓にのつてきた。きはった料理ではなく、日常のお菜(おかず)である。

ちよつと張り込むときには、揚ではなく、鯨の鹿子、いわゆるベーコンにする部分や、黒い皮のついた脂のコロだった。あつあつをふうふうしながら、水菜に熱がとおり過ぎず、まだシャキッとした所だべる。ハリハリ鍋である。



露地栽培の水菜を手に「矢尾吉」の池端利明さん

今、鯨のハリハリ鍋はめつたなごとは食べられない。IWC(国際捕鯨委員会)の決定を受けて一九八五年、日本が捕鯨禁止を受け入れたからだ。それでも、旬の水菜を見つけると、どうにかして、ハリハリ鍋が食べたい。そこで考えたのが脂身の多い牛肉のコマ切れや切り落とし、豚のバラ肉を使う。来客のときは合鴨を奮発するから、葉味に柚子が欠かせない。

ところが、このハリハリ鍋が今危機にある。主役の切れ水菜の露地栽培が減っているうえに、冬場でも旬まで待たないで市場にでるからだ。若い株は鮮やかな緑は確かに美しいが、味は太った旬の、葉先がちよつと霜やけたような株にはかなわない。白菜の大玉ほどになった株が、早春の気配を感じて、つぼみをつける身支度の頃こそ旬の旬だ。噛めば茎から甘い汁が口中に広がる。本来、風花や霜や雪、寒風に育てられ、春を待つ野菜である。

残念ながら、今では旬の大株にはなかなか出会えない。私の手近では、京都のプラッツ近鉄の矢尾吉さんだけが農家の名前入りのを出す。旬を食べさせてくれるために、天候とにらめっこしながら、畑をやつてくれたのは、このお百姓さんなんだ。熱い思いで、大株を抱えてかえる。今夜は合鴨を奮発するしかない。

春雪の忽ち溶けぬ水菜畑

野風呂 (『最新俳句歳時記』より)

黒川 美富子

●くろかわ みふこ 1946年高知県生まれ。立命館大学(専攻:日本史)卒業後出版社勤務。29歳で独立、図書出版文壇を創業。学術・環境・障害者問題・社会福祉関係などの出版に取り組み、代表者として現在に至る。エッセイストとして、聴覚障害問題、衣類、料理、映画などを新聞、雑誌に執筆。〈著書〉『遠い声』『近い声』『ひとばな』を著してきたが『アイ・ラヴ・フランスーシネマ・インキング版』など。

今後探究したいテーマは人ほど生きてきたかを求めて、おもに東アジアの奥地を訪ね、その暮らし模様の探究を続けている。

八幡商業高校のアンケート(31人)

1月17日滋賀県立八幡商業高校・国際ビジネス3年5組にて、森代表が「これから始まる循環型社会をどう生きるか」をテーマに講演をしました。アンケートには、フレッシュな感性が表現されています。ご協力ありがとうございました。

1.本日の講演は良かったですか

・はい 30人 ・いいえ 1人

2.印象に残った事をお書きください

- ・自己矛盾
- ・資源は有限である事
- ・ユニクロの進化のこと
- ・ヨーロッパに比べ日本の環境問題対策があまいということ
- ・名人の話
- ・「循環型社会」(人は環境によっていかされているという言葉)
- ・経済至上主義社会の問題点(大量消費大量流通、リサイクル)
- ・「Q.C.D」
- ・車についての話(北欧の自動車税、co2削減政策について)
- ・MOH活動
- ・人口増加
- ・「幸せ」について
- ・京都議定書

3.講演を聴いて循環型社会に興味を持ちましたか?

・はい 26人 ・いいえ5人

はいと書かれた人にお聞きします

興味を持った点はどのようなことですか

- ・人は一人では生きられない 環境により生かされている
- ・人間には漏れなく、成長に伴い死が近づいてくること
- ・ペットボトルの再利用について
- ・全てのものは循環しているということ
- ・循環型社会の必要性が増してきていること
- ・「M.O.H」この言葉を生活にとりいれていこうと思った

- ・循環型社会が経済至上主義に取って代わったら、会社が次々と潰れるという話
- ・自然を使い捨てにすること自然をそのまま残すこと

- ・資源の枯渇
- ・ユニクロ(大量生産大量消費)
- ・今だけが良ければいいという会社が多いが、次の世代のために経営を維持しなければならないということ
- ・欲望で成り立つ経済は間違っているということ
- ・循環・共生・抑制の社会が必要だということ
- ・ヨーロッパの環境に対する意識
- ・欲求が増すと循環型社会が成り立たないということ

いいえと書かれた人にお聞きします

なぜ興味がないのですか

- ・循環型社会は大切だと思ったが、私は全く興味がない
- ・循環型社会のことがよくわからない
- ・難しいと感じた

4.循環型社会についてもっと知りたいと思いますか

・はい 19人 ・いいえ 12人

はいと書かれた人にお聞きします

どんなことを知りたいですか

- ・これからの社会
- ・外国にゴミを運んでいることについて先生の考えを聞きたい
- ・資源環境について
- ・また森さんの話を聞きたいです
- ・自分も循環型社会の成立に貢献したい、個人にもできることはなにか
- ・コストについて
- ・これからの環境対策と経済対策

- ・日本ではヨーロッパのような取り組みができないものか
- ・世界規模での循環型社会

5.環境配慮型商品のショールーム“eプラザ”を見学したいと思いますか

・はい 23人 ・いいえ 8人

6.あなたの生き方を支える一言とエピソードを教えてください

- ・「何もしないでできるはずがない」
- ・まわりにみんながいてくれること
- ・「人はみな、大河の一滴である」五木寛之
- ・「頑張っている人に軽々しく『頑張れ』って言うな」
- ・小学生のとき中学生と間違えられた。それ以来、子供らしく振る舞おうと思った
- ・「周りなんかええで、自分がしたいようにしたらええやん」
- ・「見えない努力は勝ちにつながる」
- ・「人生は出会いである」日大の鈴木監督から
- ・「チャレンジ精神、プラス思考」
- ・「ほんの少し、少しだけやれる気がした」好きな歌の歌詞から
- ・「克己心」部活の恩師から
- ・いろんなひとの幸せを見ること
- ・「自分らしく」
- ・「克己、感謝、気配り、気概」部活顧問の先生の言葉
- ・「正負の法則」、「この世に偶然はなく、全てが必然です」
- ・「至誠、剛毅、進取」祖父が残してくれた言葉
- ・「笑顔で前進」中学のバレー部での恩師が作って下さった団幕の言葉

読者からのお便り

● 昨日出張先の新潟でテレビを見て「活躍を知りました。ぜひ「M.O.H通信」をお送りいただきますようお願いいたします。」

好きな言葉のひとつに「知足」があります。

東京都 田中邦穂

● 「三万よし」

深い、実に深い言葉ですね。

岩手県 村松幸雄

● 心に残った一言「一念為せば成る」彦根市 衆議院議員 田島一成事務所

● 最近の石油価格の高騰で「ガソリンが高くて困る」という話はよく聞きますが、「おかげで交通渋滞が減った」という話は聞きません。

京都議定書、6%削減の基準年である1990年を思い返してみると私は当時高校生。それから今日までに新たな家庭を持ち、車を持ち、モノもたくさん増えました。これを、以前の状態より減らさなければならぬとしたら、途方に暮れてしまいます。

● どれだけ多くの人が事の重大さに気付き、本気で取り組むことができるでしょうか。とはいえ、まずは一人ひとりができることから。この冬は、厚着と体を動かすことで暖まることから挑戦します！

滋賀県エコライフ推進課 丸山 滋賀GNP NEWS Vol.84 会員コラムより

(敬称略)

アウグスブルクから

〈ドイツだより—1〉

原 修子



今号から、ドイツでの環境に関する身近な状況についてお便りさせて頂くことになりました。その中で追い追いついて行くことになると思いますが、まず、私の住んでいるところについて簡単に紹介させて頂きたいと思えます。

私が住んでいる街はアウグスブルク。環境先進国と言われているドイツ連邦共和国の中でも、環境に取り組んでいる市、環境先進市として知られているところです。「びわ湖環境ビジネスメッセ」に毎年参加していますので、ご存知の方もいらっしゃるでしょう。一方、日本との繋がりが非常に深い市でもあります。

皆様の滋賀県にある長浜市の姉妹都市です。アウグスブルクのもう一つの日本の姉妹都市、兵庫県尼崎市と共に、1959年に姉妹都市条約を締結しました。これは第二次世界大戦後、日独の間での最初のもので、先述のメッセ参加は、この長い関係の中から生まれ来て来た交流の一環です。

街の歴史は、紀元前15年まで遡ります。ドイツではトリアに次ぐ二番目に古い街。ローマ人の手により建都され、ローマの属州レティアの首都。ローマ人の街からキリスト教の街へ、そして帝国自由都市へと変わり、バイエルン王国の統治を経て、バイエルン州アウグスブルク市となりました。この長い歴史の間には色々な出来事あり、そして歴史に名を残した一家、人々が輩出し、また関係しています。

例えば世界最初の社会福祉施設・フッゲライ・フッカー長屋のフッカー一家。ヤコブ・フッカーの名前は日本でも知られています。今年、生誕250年が記念されているモーツアルト。そのモーツアルト家の故郷の街でもあります。ヴォルフガング・アマデウス・レオポルドがザルツブルクに移住するまで、モーツアルト家は代々アウグスブルクに住んでいました。その他の芸術家としては、ドイツ古典派画家ハンス・ホルバイン父、或いは20世紀の劇作家ブレヒト等を挙げること出来ます。技術関係では、ヤンマー社で知られているディーゼルエンジン、そのディーゼルエンジンの開発・試運転をルドルフ・ディーゼルがこの地にあるMAN社で行いました。これが後に姉妹都市関係へと導いて行くこととなります。

或いは今では家庭の必需品である冷蔵庫。世界最初に冷蔵・冷凍装置を開発したのは、当地のリンデ社です。航空宇宙関係では、世界で最初のジェット機の試験飛行、或いは音速の壁が破られたのもこの地。ヨーロッパの通信衛星アリアーネの燃料タンクもアウグスブルクで製造さ

〈ショートショート〉
ふれあい
第一回
『夕日』

中井 二三雄



れています。メッセーシニミット社もここにありました。そしてまた、大司教聖堂やシエツラー宮殿、あるいは写真の市庁舎のような歴史的な建物、ロマンチック街道最大の街。アウグスブルクは伝統と歴史、そして現代の息吹く街、環境の街です。その街からお便りさせて頂きます。

●はら しゅつこ 徳島市出身。1972年よりドイツアウグスブルク市在住。國學院大学文学部哲学科及びアウグスブルク大学カトリック神学科卒業。職業、通訳。翻訳。

原 修 子

日本が、今のよう豊かではなく、まだまだ貧しかったころ…。

下町の粗末なアパートの一室に、母親と一人の男の子が住んでいました。父親がいないために、一家の働き手はお母さんだけ。母親は、来る日も来る日も、昼も夜も働きつめてました。そんな姿をいつも見ている男の子。

母親思いの彼は、

「たまにはどこか連れてって」とか「あれを買ってほしい。これが食べたい」なんて、とても言えません。

しかし、ある日、あまりにも夕焼けがきれいなので、つい、「ねえ、ねえ、お母さん。とてもきれいだよ」と、思わずもらしてしまいました。

目をしょぼつかせながら、忙しそうに動かしていた手を止めた母親は、夕日が沈むまで、まるで絵のような光景を、一緒に眺めてくれたのです。

「なんて美しいのかしら…。お母さん、長いこと、ゆつくり夕日なんて見たことなかった。教えてくれてありがとう」

こう言うなり、思いつきり抱きしめてくれました。ちょうど今日は、男の子の誕生日。

—— 最良のプレゼントになったことはいうまでもありません。

中井 二三雄

●なかい、ふみお 1949年、守山市生まれ。広告、出版、映像関係の仕事を経てフリーに。日本シナリオ作家協会理事、滋賀県文化振興事業団発行「湖国と文化」編集長。大津市在住。

おミユキの 山暮らし子育て日記

作：おミユキ 



本の紹介

最近入手した、気になる本を
ご紹介します。

- 著者／ワンガリ・マータイ
- 訳者／福岡伸一
- 発行所／株式会社木楽舎
- 価格／14200円＋税
- 内容／「もったいない」という日本語に感動し、これを世界に広めようとしている女性をご存知でしょうか。彼女の名前はワンガ



「モットアイナイで地球は緑になる」

リ・マータイ。2004年、環境に対する活動で初めてノーベル平和賞を受賞。本書は彼女が創立したNGO団体「グリーンベルト運動」について、植樹を通じて貧困層の生活向上と女性の地位向上を目指す、権力と戦った30年間のワンガリ・マータイ本人が記す。



「ひととはなにを着てきたか」

- 著者／黒川美富子
- 発行所／文理閣
- 価格／1900円＋税
- 内容／衣類の歴史は、社会の変遷と深い結びつきをもつ。著者はこまやかな調査と取材を足がかりに「着る」という人間の営みに肉薄し、人々の歴史…古代から現代までの道のりをたどる。



「新・環境倫理学のすすめ」

- 著者／加藤尚武
- 発行所／丸善ライブラリー
- 価格／780円＋税
- 内容／14年、ふりに環境倫理学の第一人者が書き下ろした、ベストセラー『環境倫理学のすすめ』続編。著者は鳥取環境大学名誉学長。さらに深刻になる環境問題に直面する若い世代に向けて、重い課題を投げ出さないでほしいと、著者の願いが込められている。

● 著者／滋賀県知事 國松善次
● 著者／塩田潮
● 発行所／時事通信社

対論「自治改革」



- 価格／16000円＋税
- 内容／「自然と人間がともに輝くモデル創造立県滋賀」を全国に発信する國松知事の魅力を、作家の塩田潮氏が上手に引き出している。地域から日本を変えようねりを起してほしい…と早稲田大学大学院の北川教授も期待している。



● オノ ミユキ (本名 加藤 みゆき) = 1974年生まれ。滋賀県志賀町育ち。1997年に朽木村 (現高島市) に移住。朽木の自然、行事、人間などを3冊の本にまとめ出版。現在は2人の子どもを子育て中。

さきばあちゃん

今関 信子



イラスト：佐々木洋一

『心があつたまゝの話』の選考会を終えました。「A滋賀中央会の事業です。「人権」などという堅苦しい言葉を使わずに、一人一人の人間が大切にされるようにしたい、そんな願いを持って、同和対策室が企画。全国から体験談などを公募して、それを冊子にまとめ多くの人に読んでもらっているのです。今年のものがまとまるまで、九冊目になります。これまでも、すてきな話がたくさん寄せられてきました。

ですが、今年度は、と／＼／＼／＼に心が躍っています。応募作品の中に、ひとつと考える人がいたのです。その人の名前は、「さきばあちゃん」。さきばあちゃんは、町の有名人で、市長にもチキ屋の親方にも顔が知られています。

息子さんは社長です。それで、さきばあちゃんの暮らしがりに気づいています。世間体が悪いのです。そんな息子にさきばあちゃんは、「人様のお金を盗んでいるんじゃない。格好がわるいだけ。そんな目で見るお前が間違っている」と意見して、朝六時には起き出して仕事を始めます。

さきばあちゃんの稼業は、拾い屋です。「この仕事を始めたのは、七十才を過ぎてからです。それまでは、町内の清掃奉仕をしていたのですが、いつのまにか婦人会の人たちが活動に加わってきて、手が足りるようになつたのです。そこで、さきばあちゃんは、新たな働き口を探して転職したのでした。

転職したその日から、さきばあちゃんは、手押し車を押して、カンヤ釘、ガラス瓶やタンボールを集めて歩きはじめました。さきばあちゃんは、生きる力が豊富な人のようです。集めた資源ゴミをいかに持つていったり買つてもらえるか、ちゃんと情報を持つていって、ここでせりつたお金を貯めています。一ヶ月貯まると、それを持って市役所に出かけていき、毎月五日、施設に寄付するのです。

さきばあちゃんの稼業は、決して多くありません。町内を巡り歩いているとき、捨てるものが少ない同業者に会うと、分けてしまつたからです。またまた現役で自負していますが、本業の同業者の邪魔にならないよう、あくまで道路脇に捨てられるゴミを拾つのが、さきばあちゃんの稼業方です。

ある日、さきばあちゃんは、頼まれごとをしました。子どもがヤクザの自動車に傷をつけて、警察に捕まってしまったのです。傷は十玉玉つけたそうです。さきばあちゃんは、親方と交渉して子どもを連れ戻しました。

そんな元気なさきばあちゃんが、自動車事故にあつて／＼／＼／＼になりました。

講演日記

皆様のご支援でたくさんの講演依頼を頂きました。
2005年11月～2006年1月の講演を
ダイジェスト版でお知らせします。

- 日 時:2005年11月28日
- 主催者:さかい新事業創造センター〈S-CUBE〉
- テーマ:「MOH活動について」
- 場 所:さかい新事業センター
- 参加者:50名
- 演 者:小川 暢保
- 内 容:「もったいない・おかげさまで・ほどほどに」

- 日 時:2005年12月19日
- 主催者:中小企業家同友会青年部(←要確認)
- テーマ:「循環型社会を予測した事業開発」
- 場 所:新江州 eプラザ
- 参加者:11名
- 演 者:森 建司
- 内 容:1.環境問題に対する取り組み 2.CSRと企業活動 3.近江商人と「三方良し」を現代におきかえると 4.循環型社会構築に関してのプロセス 5.LOHAS、MOH活動



- 日 時:2006年1月17日
- 主催者:滋賀県立八幡商業高校
- テーマ:「これから始める循環型社会を生きる」
- 場 所:滋賀県立八幡商業高校セミナーハウス(←要確認)
- 参加者:45名
- 演 者:森 建司
- 内 容:1.経済社会のたどる道 2.循環型社会をつくる 3.言い伝え、親の教え、師の教え、読書、倫理、哲学 4.丁稚奉公、内弟子

- 日 時:2006年1月19日
- 主催者:龍谷大学RECコミュニティ講座
- テーマ:「真の循環型社会とは何か、それへの転換は可能か」
- 場 所:龍谷大学瀬田学舎
- 参加者:15名

- 演 者:NPO環境共生社会システム研究所 所長 内藤 正明
- 内 容:1.「循環」の狭義と広義 2.いま循環が求められる背景 3.循環型社会成立の条件 4.循環型社会形成のための変革 5.真の循環型社会づくり 6.水環境保全の新たな展開

- 日 時:2006年1月23日
- 主催者:中小企業家同友会北近江支部例会
- テーマ:「変化に対応できる中小企業を目指して」
- 場 所:北ビワコホテルグライエ
- 参加者:45名
- 演 者:森 建司
- 内 容:1.15事業部を創る 2.改革は「破壊と創造」である 3.近江商人の「三方良し」を現代におきかえると 4.求められる中小企業の「経営学」 5.事業継承の難しさ



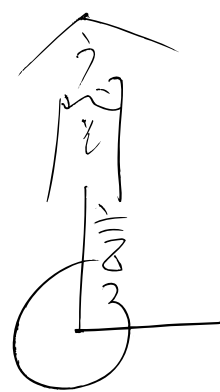
- 日 時:2006年1月28日
- 主催者:湖北林業協会
- テーマ:「これからの湖北の森林を共に考える」
- 場 所:滋賀県立文化産業交流会館小劇場
- 参加者:100名
- 演 者:基礎講演/荻野 和彦、パネルディスカッション アドバイザー/森 建司
- 内 容:1.湖北の森林づくりに課せられた使命 2.なぜ今、「琵琶湖の森林づくり」なのか 3.里山で薪をつくった 4.里地に木を植えてスギ、ヒノキの美林をつくった 5.奥山で炭を焼いた

●ささき よついち 1940年生まれ。高校在学中より習作のため、長浜市周辺の風景を数多く描く。1964年長浜市展特選受賞、以降受賞を重ねる。滋賀県展特選4回受賞。西友長浜築市などで個展数十回開催。現在、デザイン・製版事務所代表。著作には画文集「30年前の長浜」がある。市内にて洋画入門講座を開き、後進の指導にも尽力。長浜日曜画家協会創立より代表世話役を務める。長浜市在住。



救急車で病院に運ばれる途中、「おひらひら歩いてきた自分も悪い。前途ある青年を罰しないで...」と言っていて、息を引き取ったそうです。
ささきはあちゃんのお葬儀には、市長さん、拾い屋さん、そのものじめの親分さん、町内会の人たちや施設の子どもたち、さまざまな人たちが

●いませきのぶこ 1942年東京生まれ。東京保育女子学院卒業後、幼稚園教諭となる。7年間保育者として働いた後創作活動にはいる。日本児童文学者協会理事。
〈主な著書〉「小犬の裁判はじめます」1987 童心社 青少年読書感想文コンクール課題図書。「さよならの日のぬすみ花火」1995 国土社 青少年読書感想文コンクール課題図書、厚生省中央児童福祉審議会推薦文化財。「地雷の村で」「寺子屋」「へり」2003 PHP研究所 など多数



集まっていたと聞いています。
私は、元気なささきはあちゃんに逢いたかった、と心から思っています。

「人間学」を学ぼう

その5

井上 昌幸

現在、彦根で「近江素交会」と名づけた勉強会を催していますので、そこで学んでいる安岡正篤先生著「人間をみがく、驥と教育の可能性」の「齊家の学」から抜粋していききたいと思います。

この著書は昭和十六年（六十五年前）に講演されたものであり、時代の背景が異なることを頭に入れて読んでいただきたい。

家族と国家の在り方

今日（六十五年前）の日本の正しい学問風俗から見ても非常によくないと思われるいくつかの問題がある。

一 物を抽象的に見て、具体的、実践的でない、空論空想に耽つて実効性に乏しい。

二 自ら省みることが甚だ甘く、他人を責めることは甚だ厳しい。

三 天下国家を論ずることが盛んである割合に修身、齊家、治郷というような天下国家を治めるに当つての基本条件であるそれらの点に關して甚だ努力が足りない。

ことに家庭、日本の家族制度の精神から見た家を齎（もたら）すこと、それと国との關係、これはよほど現代にあつてよく見直さなければならぬ。

江戸時代は、二百六十藩に分かれていて、田舎に行けば学識のある紳士さんや僧侶がいて、地方独特の風俗個性があつてそれぞれ自治的に努力していたが、明治維新後だんだん近代的法律制度組織というものができるにしたがつて、現在は二万二千の地方町村が万事国家に依存して、自治的機能を弱めてきた。と述べておられる。

修身、齊家がまず基本であり、「大学」の三綱領八条目を学ぶ必要がある。

中江藤樹は「大学考」の中で、「明德を明らかにする」ためには「意を誠にすること」が大切である。意というのは心の倚るところ（心の調和・平衡が失われて起るコンプレックス）であり、悪念は「意」の潜在的なものである。「誠」は純一無雜、真実無妄の本体で、つまり「良知」である。と書かれている。

日本人に自治能力はあるか

ここでは、明治維新以後中央集権がすすんで、町村や田舎が中央へ依存するようになり、弱体化していることを危険視されて、「今後の日本が進んで行くべき根本として努力しなければならぬことは、再び国家を組織する細胞的自治体というものに旺盛な自治力を与えること、人物の点において、あらゆる文化において盛んな自治的能力を付与すること、を回復することである。これがあることにより、国家全体としていかなる変乱に遭おうともそれをよく解脱し得るのである」と述べておられる。

そして、ドイツ、イタリア、イギリス、フランスの政治情勢を分析して「日本には各国の持つ長所を自在に具備しているからうれしい。日本人は」面自由を愛する。束縛されず思うままにふるまう性格を持っている。あまり法律づくめで縛られるようなことは好かない。神ながらの道こそ大自在三昧である。正しい意味においての自由というものは、西洋人よりは東洋人のほうが愛する。ことに日本人が最もこれを愛好する。その日本人がもつともよく全体への奉仕、没我の奉公、いわゆる滅私奉公に生き。…今後の日本は、やがて幾年かの戦争の後の重圧がどつしりとかかってくる。これからの日本は日を追つて従来いろいろやつてきた疲労と混乱が発生してくる。…結局各人にかぶさってくる全体的苦悩は、やはり各人が発奮してこれを解脱するよりほかない。だからこの国家を構成している地方町村や各家各人にいかなる自治能力があるかどれほど生命の弾力性があるかということが来るべき、否まさに来たりつつある日本の内憂外患をいかに解脱し得るかということが重要な鍵である」と述べておられ、昭和十六年にすでに第二次大戦後の日本の姿を予見されている。

更に、「そこていわるゆる國家的統制管理も結構だが、それはやむを得ざる臨機の処置であつて、常の問題、原則としてはあくまでも各郷土郷土の自治的精神、自治的能力を旺盛にしなければならぬ。経済ばかりではない。教育においても宗教においても芸術においても、何においても、郷土においても、自治的自発的な精神を旺盛にしなければならぬ」という意味で、郷学を我々が提唱してきた。それで幸いこの頃は地方に大分郷学精神が振興してきたように思われる」と述べておられ、地方における自治能力を上げることの重要性を指摘されている。読後、参加者が意見を交換しあつた。最近、地方分権の話がよく出てくるが、安岡先生は六十五年前にこの件について問題提起されており、改めて安岡先生の先見の明に感心した次第である。

失せゆく郷学と家学

「今日日本において廢れている惜しむべきもの一つは、実にこの家々によい風格、精神がなくなつてきていることである。家庭の中に当然なければならぬ信仰、我々の祖先が持つていた驥、礼節、趣味、家風、家憲というようなものが抜けていることである。そして我々の家庭というものが単に夫婦親子の協同生活所というふうなものになつてしまつた。味の無い機械的組織になつてしまつた。…冷静に考えて、我々の家とか我々自身にどれほど真の文化が生きているか。これを冷静に考えれば考えるほど非常に薄弱になつてきていることは事実である。そういう意味から我々の先祖の家における生活というものを、改めて、落ち着いて反省して見ることは非常に必要なことである」と述べられている。また、「いろいろの道徳礼

節の問題もそうである。何が道徳であるとか、何が礼節であるというような議論は盛んであるけれども、道義というものが生活化していない。我々が食事を一つするにしてもそうだ。たとえば今の人が言わなくなっている言葉、我々が始終子供の時に聞かされた言葉に「もったいない」と云うことがある。御飯を粗末にしてはもったいない、水を粗末にしてはもったいない。これは物に感謝し、物を大切にすることを言葉である。物と我との生命の交流から発する言葉であり思想である。物をわが身に体して生きる。物と一つになって生きるということには確かに薄くなった。物と物とが冷たく離れずに、温かく結ばれるところに道徳がある。古人はその道徳を単に理論的形式的にだん押しせずに、これを信仰や芸術と結び付けてゆかしく我々に与えてくれた。これを称して「躰」という。躰という字は身を美しくすると書くのである。道徳というものを美しく体現することである」と述べておられる。

これは昭和十六年つまり今から六十五年前に書かれていることに注目しなければならぬ。当時すでに安岡先生はこのような危惧を持っておられたのだが、現在の我々の生活を振り返ってみると「もったいない」という気持が非常に希薄になっている。我々は日々の生活を見直すことが出来るだろうか？

失せゆく郷学と家学 一一

「昔からのゆかしいたしなみで、娘などを早く起こすのに母親は何と言ったか。女というものは決して寝顔を親や兄弟や夫に見せるものではない。こういうふうに教えたものである。他人に寝顔を見せまいとすればどうすればよいか。他人が起きない前に起きるほかない。他人が寝てから寝るしかない。つまり礼節を命令ではなく、女の一番大事な女の一番欲する美にかこつけて教える。実に巧妙にしてかつ切実な教育である。」

また私たちは子供の時に親たちから、勝手な所に小便すると蛙やみみずやたぬきにたられるから道に小便してはいけない。こういうことを言われたものです。…みみずや蛙に対して礼儀を守れば滅多に小便できないということになる。到る所に小便すべからずということになるのであります。実に美しい礼節であり美しい思想である。

そういう生活の哲学、芸術、信仰というべきものが我々の親たちの家庭には豊かにあった。またそれが教養されていた。我々はそういうものを失ってしまった。

そこで、こういうふうには本当の生命というものから遊離して、形式化した文化になってしまうと、国家の全体的組織機構に比して、その細胞である我々の家とか身というものは非常に空虚になってしまう。…今、日本に最も失われておるのは郷学と家学である」と述べておられる。

齊家の学の根本条件 一

ここには齊家の学の根本的内容となる条項をいくつか上げており、「一、家戒、家規、家憲、家風」など、一身に道徳があり、国家に法律があり、人情に厚い美しい風俗習慣があるように、一家の中にも、一家の精神、一家の法則というものがなければならぬ。…

昔はある土地に生活集団ができると、その中心に氏神を祀る。その社に集まって会をするから「社会」という言葉がある。…本来の意味はそういう意味である。その社の集まりにおいて、つまり社会において識せられる範囲の生活集団そのものを社会というようになった。」と述べておられ、「社会」という本来の意味を理解することが出来た。

齊家の学の根本条件 二

「社会」という言葉の意味を理解するために、繰り返し読んだ。

そして出席者から、社に集まる時は真っ白の扇子を持つていくが、これは身を清めて無垢な心になることを意味しているとの発言があり、花嫁が角隠しをするのも人間にはそもそも邪の心があり、鬼のような心を持っているが、花嫁の角隠しにはそのような心は一切出ませんという意味があるようだ。

論語・子罕篇第九に「孔子は私意・執着・頑固・自我の四つのことを絶たれた」(子、四を絶つ。意なく、固なく、我なし)という言葉があるが、社会生活の中では自我を抑えることが大切である。

この節では郷学や家学が学校でも家でもできていないので、中国の清の時代に石天基という人が書いた「伝家宝」の中の「家宝聯理」をこれから学んでいくとして、「そこでこの『家宝聯理』を読んでいくと、彼の人生観が我々にはつきりと印象して、そうしてそれを通じて石氏の心境がよくわかるような気がする。そういう意味で、『家宝聯理』による石氏の齊家思想、石氏自身の根本的的人生観というものを紹介して、みなさんの参考に供しようと思う」と述べておられる。次回からその内容を説明していきます。

井上昌幸

●いのうえ まさゆき 1940年1月1日生まれ。2000年日本電気硝子(株)定年退職。現在、滋賀県異業種交流連合会会長、STEP21(滋賀県シニアテクニカルエンジニアリングパートナーズ企業組)専務理事、滋賀県技術アドバイザー、大津木鶏クラブ代表世話人、近江素交会代表世話人
(資格)ISO14000&9000審査員補

〈MOH-ECOTOURISM—1〉 エコツアーへの誘い

檀上 俊雄

バブル崩壊とともに、観光の中核を担っていたテーマパークは持続性に欠け、砂上の楼閣のようにもろくも消えてゆき、それに代わる旅行形態としてエコツアーは登場した。これは景気低迷だけでなく、石油枯渇、環境問題への危機感が背景にあり、さらに神戸・淡路大震災をはじめとする自然災害が多発したことも大きく影響している。高度成長以降の成長神話の崩壊や、万能に思えた科学の非力さを目の当たりにして、一気にエコツアーへの期待が高まったのである。

こうした動きが加速したのは、1997年の京都議定書に拠るところが大きい。1992年の地球環境サミットにおける、気候変動に関する国際連合枠組条約の目的を達成するために第3回締約国会議で採択されたのがこの京都議定書であり、先進国等に対し、温室効果ガスを一定量削減することを義務づけるもので、2005年2月16日に発効した。こうした目標数値、手順が示されたことで、社会的にも個人の生活レベルにおいても、さらにエコツアーリズムにおいても、環境への関心が具体的な深まりをみせることとなったことは重要である。

私たちが住む美しい日本は、古来から旅文化が幾重にも積み重なった国である。貴族の熊野詣などの事例だけでなく、庶民においても木と紙と草でできた質素な家に住みながら、講によつて伊勢参りなどの巡礼の旅へ出ていた歴史がある。自由往来のままならない時代での唯一といっていい合法的な旅ではあるが、何が彼らをして旅に駆り立てたのだろうか。いかなる目的であれ、情報の乏しかったであ

ろう時代においては世間を知る唯一の手立てであったことはまちがいない。こうした状況を分析してゆくと、エコツアーリズムを希求する現代人と共通する部分が多いことがわかる。自らの体験を通じて知りたいと思わずにはおれない心理とでもいうのだろうか。エコツアーリズムの考え方や方法論は外国のものをたまたぎ台にしていくが、世間を知る旅という伝統をベースにして、エコツアーリズムなりの視点で多彩な風土が展開する日本列島を再検証する必要がある。さもないとエコツアーリズムもテーマパークの二の舞いとなる懸念される。

私たち人間には生活圏というものがある。ここには祖先が生活の糧を得る為に足を踏み入れてきた二次林的な自然が今に伝えられている。水を通じてアプローチすれば、川の流域が基本的なエリアとなる。生態系から見てみるとカモシカやクマの行動範囲、ブナ、ミズナラ、アシウスギの混生林の植生などから、湖西を例にすれば、湖北、丹波高地を含む地域的な広がりで見えてくるべきであろう。

エコツアーといえは、知床、白神、尾瀬、屋久島などがもてはやされているが、これらは原生自然の残る場所である。日本列島の原風景をイメージするには役立つが、身近な場所とあわせて親しむことが必須となる。これにより山における植物の垂直分布のように、南北2000キロの列島の多彩な風土が見事に繋がってゆくのだ。

物質的に豊かな生活を送るようになると、失うことの恐さから守りに入りやすいのだが、常に自然と向かい、生態系のしくみを自らの五感

で受け止め、たくましく生きた人びとの歴史を深く知ることが、自然の恵みを享受してこそ成り立つ永續的な暮らしを導く唯一の道といえるだろう。自然と暮らしを結ぶエコツアーは実に感動的で有意義な世界へ私たちを誘う。

ここでエコツアーリズムに、まだ縁のない人のために、その定義をおさらいしておこう。

所管となる環境省では、「自然環境や歴史文化を対象とし、それらを体験し、学ぶとともに、対象となる地域の自然環境や歴史文化の保全に責任を持つ観光のあり方」と位置付け、実現のためには「地域の自然や文化に対する知識や経験の案内ガイダンス。地域の自然や文化を保全・維持するための取り決め」が必要という。そしてその効用として、「旅行者に対しては、自然や地域に対する理解が深まり、知的欲求を満足させる。地域の自然環境・文化資源に対しては、それらの価値が維持されるよう保全され、または向上する。観光業に対しては、新たなニーズに的確に対応し、新たな観光需要を起すことができる。地域社会に対しては、雇用の確保や、経済波及効果、住民による地域の再発見に



より、地域振興につながる」という。そして強気に推進すべく、旅行者、地域住民、研究者、旅行者、行政等が堂に会し結成されたのが日本エコツアーリズム協会(旧エコツアーリズム推進協議会。エコツアーリズムの世紀へ1999を出版)である。

なお、日本よりも早くエコツアーリズムに取り組み、大きな影響をもたらしたオーストラリアにおいて、ストーンは「自然に基づき、教育的、解説的な要素を含んだ活動であり、持続可能な方法で管理、運営されるツアーリズム」と、エコツアーリズム教本「先進国オーストラリアに学ぶ実践ガイド」(平凡社2002)で定義付けている。

同エコツアーリズム協会では、「生態系において持続可能であり、環境や文化に対する理解を深め、感謝の念や保

護の意識を生み出す「リズムム」とあり、あわせて見ると、既存の観光業者を念頭においた感のある日本の定義と対比しやすい。

今後何回かにわたり、持続可能社会の一翼を担うエコリズムムの可能性を探つてゆく。旅全体からの視点、エコツアーの企画から実施の手順、エコツアーの現状を総覧し、湖西地域を含む国のエコリズムム推進地区の現状を追い、生活感にあふれたスーパーリズムムへの道を展望したいと思う。

※写真は2点とも近江坂の大日ブナ原生林。高島市は日本列島の中央分水嶺の中央部にあつて、オアシスと呼ぶにふさわしい自然環境にある。国境から三国岳に至る湖西トレイルは地元が山道やケモノ道を再利用して整備したマキノ、今津、朽木を結ぶ約80キロのネイチャートレイル。豊かな混生林の自然が残された琵琶湖水源の森を、近江坂をはじめ多くの若狭越えの古道が横断していて、まさに自然と人が出会う場所。

檀上俊雄

■だんじょう としお 1951年広島県尾道市生まれ。立命館大学文学部地理学科卒。2001年株式会社昭文社旅行書編集部退社。山と自然研究会青山舎代表。日本旅のペンクラブ会員、湖西の山ネット事務局長
著書／「比良山・湖西の山」山と溪谷社（共著）

M・O・H ニュース

「MOTTAINAI寄席」

2005年11月23日毎日新聞

ものをたいせつにする気持ちを笑いとともにも伝えようという試み、「MOTTAINAI寄席」が昨年11月22日、東京都目黒区にあるめぐろパーシモンホールで開かれた。このイベントはノーベル平和賞受賞者のワンガリ・マータイさんが提唱する「MOTTAINAI運動」のひとつとして開催された。この日講師の神田紫さんと落語家の三遊亭右紋さんは「もったいない」をテーマにした新作を披露し、会場を多めに盛り上げた。参加した人々からは「とても楽しかったし、『もったいない』について考えさせられた。」「子供たちに聞かせてあげたい」という声が聞こえた。

「『もったいない』と宗教とのつながり」

2005年11月23日

浄土真宗本願寺勸学派の中西智海さんは、昨年12月12日に東京都杉並区にある築地本願寺和田堀廟所で「もったいない」をキーワードに講演を行った。中西さんは以前に同廟所で講演をした際、「もったいない」に関する話を紹介。最近「もったいない」が話題の言葉になっていることから、これがテーマに決定した。

1月25日に野洲文化ホール横の中央公民館で、野洲生活学校の落合房子さんによる味噌づくり講習会が開かれました。



国際ソロブチミスト長浜環境奉仕委員会

M・O・H活動協力の一環として、メモ帳を作っていました。



「『巡回バス』で送迎します」

2005年11月5日京都新聞

大津市藤尾町のスーパー「マイスターシルク100」では、昨年四月から地域の買い物客を無料で送迎する巡回バスの運行を続けている。坂道の多い同店周辺では高齢化が進んでおり、買い物に行きたくてもなかなか行けない人が多く、そんな買い物客の利便性を考慮したサービスだと地元では評判だ。一日約百人の利用があり、車内がコミュニケーションの場も兼ねている。

「循環型社会を目指す～M・O・Hの会～」の
発足に当たって

代表 森 建司

20世紀型社会は経済至上主義の時代であった。科学技術の進歩とそれに伴う工業や流通の発展は、世界的なスケールで人々に物による恩恵をもたらしたが、同時にバランスのとれた自然との共生社会を破壊した。経済至上主義とは物の豊かさを最高の幸せとして捉え、その対極にあるものの価値をほとんど消し去ろうとするものである。

今こそ新しい時代として循環型社会を作ろうとしているわれわれは、自己を証明する、こころや思いを取り戻さなければならない。

この実現のために「循環型社会を目指す～M・O・Hの会～」を設立する。



西の湖はヨシの産地。冬の間に刈り取られたヨシが春を待つ。

《次号予告》

2006年4月末発行予定

- 特集①「持続可能な社会形成に向けて2030・滋賀モデル」(仮題)
- 特集②対談「環境倫理は循環型(持続可能)社会へのかけはし」(仮題)
鳥取環境大学名誉学長・加藤 尚武氏×循環型社会システム研究所・代表 森建司
- 特集③対談「循環型社会におけるバイオの役割」
滋賀バイオ産業推進機構理事長 熊谷 英彦氏
ほか

「MOH読者の会」を予定しております。

現在、準備進行中です。
決定次第お知らせします。
場所は滋賀県高島市の予定です。

高島市の自然に触れていただき、地元の食材を楽しみながら、ゲストのお話に耳を傾けたいと思います。皆さんとの交流を楽しみにしています。詳細は、決まり次第お知らせします。

《M・O・H通信》購読受付中!

あなたも「M・O・H通信」を購読しませんか。特典として、M・O・H通信、講演会のご案内をいたします。活動やこの通信についての、ご意見もお聞かせください。

あなたのお名前、年齢、郵便番号、住所、電話番号、fax(あれば)、e-mailアドレス(あれば)、あなたの心に残った一言をご記入の上、お申し込みください。通信をお送りします。申込書をfax、郵送、mailでお送りください。

キリトリ線

《M・O・H通信》購読申込書

フリガナ		年齢	
お名前			
住所	〒		
電話		FAX	
メールアドレス			
希望口数	1口=3,000円		
あなたの心に残った一言を書いてください。			

*記入いただいた内容については、目的以外のごことに使用または転用はいたしません。

「編集後記」

■改革を必要とするような、大きな社会問題に対処しようとするとき、その課題を直接的な対処法と、その社会問題をもたらしめている原因を究明して、その根本原因に対する対策も合わせて為さなければならない。これは人が二本足で立っているように、双方とも大切な事である。.....建

■高島市の森つ子で馳走になった、ちらし寿司。野洲生活学校でいただいた、おせんぱい。「おいしかったあ」味はもちろんGOOD。ホノボノとした中で食卓を囲むことで、より美味しいのかも。ご馳走様でした。今号から壇上さんが、「エコツアーリズム」を紹介してくださいます。京都からは黒川さんが、暮らしについて書いてくださいます。ドイツからは原さんのお便りもあります。お楽しみに.....琴

M・O・H通信 Vol.11 (通巻12号)

2006年2月28日発行

●編集・発行/循環型社会システム研究所 M・O・Hの会

M・O・H 通信事務局

循環型社会システム研究所(新江州(株)内)

代表 森建司 取材 細井美保
編集長・取材 ツジムラ コトミ デザイン 伊達デザイン室
編集協力 稲垣 重雄 写真 辻村写真事務所
村山 明子 印刷 奥田珠貴
印刷 (株)ワキプリントピア

〒526-0111 滋賀県東浅井郡びわ町川道759-3

TEL.0749-72-5277 FAX.0749-72-8681

email: tsujimura@shingoshu.co.jp

[購読費振込先]

M・O・Hの会 代表 森建司

- 滋賀銀行 長浜支店 普通 136987(モウノカイ ダイヒョウ モリケンジ)
- 長浜信用金庫 本店 普通 0577468(モウノカイ ダイヒョウ モリケンジ)
- びわこ銀行 長浜支店 普通 721691(モウノカイ ダイヒョウ モリケンジ)

*記事中で写真・本文につきましては、無断転載を禁じます。